

# REPORT

## コロナ禍でも学びを止めない！ 〜やりたいことを諦めないために 様々な社会資源を見つける・活用する・広げる物語〜

なかの生涯サポーターの会 道林京子

### はじめに

2020年から始まったコロナ感染拡大は「集う、学ぶ、つながる」という地域活動を破壊した。時間が経つにつれて、このままでは活動が止まってしまう、つながりが消えてしまうという焦りはどなたも抱いたのではないだろうか。その焦りの波は、例外なく私たちにも押し寄せた。

何より大切にしてきた人と人とのリアルなコミュニケーションが出来ない悶々とした自粛生活。こうした逆境の中で「何か現状を変えるものは？」と探し、見つけたのが、ICTの世界だった。グループLINE、ZOOM会議から始め、プロボノの活用、クラウドファンディング、YouTube配信等々、

様々な社会資源を「学びのツール」として捉え、チャレンジし、新しいツールを使って活動を広げていく楽しさに結び付けていった。

「コロナ禍でも学びを止めない！」「やりたいことを諦めない！」地域に根をおろす生活者・学習者としての底力（エネルギー）が進化&深化のステップを上らせだと思おう。この時代の転換点ともいえる2年間で、「私たちが今できることは何だろう」ともがきつつ、ピンチをチャンスに変えながら、手探りで一步一步進んできた歩みの一端を記してみたい。

### 第1章 なかの生涯学習サポーターの会とは

私たちが活動する東京都中野区は人

口約33万人、新宿区、練馬区、杉並区、渋谷区に接し、程々の都会感がある街である。単身者が人口の6割を超え、昨今は大学や企業のビルも増え、更に中野駅南北の再開発の槌音も響き、未来の更なる発展を予感させる。

「なかの生涯学習サポーターの会（以下サポーターの会）」は、中野区教育委員会主催の「生涯学習サポーター養成講座」修了生有志により2007年に発足し、15年目を迎えるボランティア団体である。会員数約50人男女比は半々、年代は6代〜7代を中心とし、区民の文化芸術活動・生涯学習活動の支援、地域活動をする仲間を増やしていくことを続けている。中野区もみじ山文化センター…愛称なかのZERO（以下「な

**2021 生涯学習・実践コーディネーター養成講座**  
**区民発の講座をつくろう**  
 中野区民公益活動助成政策助成事業

みんなの力で  
 新しい講座を企画し  
 開催してみよう!

企画した講座の開催は12月27日(土)～29日(月)に区民発の講座として開催されます。11月19日までに「区民発」の募集要項を提出してください。

ご応募でもらえるものは...  
 ・学費補助金(1名あたり1万円)  
 ・講師(講師)について、講師費(5万円)・講師等を含む公費の活用について...  
 ・研修(2泊3日)の受講料(研修費)を補助して提供します。  
 ・区民発の講座は継続して開催されます。

Step	開催日	内容
Step1	9月18日(土)	① 開講式 ② 区民発の講座の企画・開催のしくみ
Step2	10月16日(土)	① 区民発の講座の企画・開催のしくみ ② 区民発の講座の企画・開催のしくみ
Step3	11月19日(土)	① 区民発の講座の企画・開催のしくみ ② 区民発の講座の企画・開催のしくみ

申し込み先  
 住所:〒164-0001 中野区中野2-9-7  
 区民発の講座 生涯学習課課長 宛  
 ホームページにて 申し込みます(応募フォーム)

お問い合わせ先  
 区民発の講座 生涯学習課課長 宛  
 TEL 03-5340-5016  
 FAX 03-5340-5015

募集期間 8月1日～14日

かのZERO)を活動の拠点に置き、区民の生涯学習活動情報の収集と発信、中野区教育委員会の意志を引き継ぐ形となった「生涯学習サポーター養成講座」等の企画、昨今は「ユニバーサルデザインマップ(バリアフリー+地域情報等)」の作成・発行等も行っている。なかのZEROは、2006年度から指定管理者(JTBコミュニティデザイン)により管理運営されることになった。そのため、サポーターの会は行政・指定管理者・市民の三者協働で生涯学習を推進させることを特徴としている。地域の任意団体の会が2022年度15周年を迎えることができたのも、会員

の力だけでなく、三者協働というスタイルで、支援、伴走してくれる存在があったからこそと感謝している。

**第2章 ICTでつながる・情報発信**

(1) SNS(ライン)をつなぐ

コロナ禍で、真っ先に取り掛かったのは、会員間のコミュニケーションのためのSNSの活用だった。政府からの緊急事態宣言を受けて2020年3月～6月まで、私たちだけでなくすべての活動は中止となった。最低限の外出しかできない日々が続く。会員のつながりを途切れさせないために、まず役員(会長・副会長・会計・運営委員等11人)間のグループラインを始めた。このグループラインの良かったことは、日常会話が続けられたことだ。「おはよう」から始まり、「交付金のお知らせ来た?」「マスク売ってない?」等、普段の何気ない会話がいかにか大切なコミュニケーションだったのか身に染みた。「メールがあれば他は要らない」「面

2021養成講座ポスター

倒くさい」というメンバーもいたが、スタンブ一つで気持ちを伝えられる手軽さがわかると、どんどん発信してくれるようになった。世の中には厳しい情報があふれ、とかく暗くなりがちな日々、少しでも明るいひと時を楽しむことができた。今では、毎日の安否確認を含め、欠かせないコミュニケーションツールとなっている。

(2) Zoomコトライ

コロナ禍の中、物理的になかなか会えないのでZoomを取り入れることを提案してみた。会員からは「まずはZoomの研修会を開催して欲しい」との要望があった。それも紙ベースで。「超初心者のZoom入門」という本を買い、簡単なレクチャーを試みた。心理的なハードルを下げないと最初のステップが踏み出せないようだ。(その後、スマホでのZoomの使い方も開催)次の段階として、ZoomのURLを送り、日程時間を決めて「お試しZoom会」を設定した。わからないときは携帯に電話をするようにフォローした。その後も数回お試しの場を設定し、慣れてもらった。失敗も多々ありつつではあるが、Zoomで

他地域の仲間も交えて研修会を開催するまでになった。

時代が変わり、場所を問わずに家に居ながら集まる、学ぶことができる機会が生まれてきたことは、嬉しい変化であると思う。コロナ禍の今だからこそ、進化する物もある。柔軟な頭と心で、自主的な学び合いを今後ともサポーターの会の目標にしたい。

〈会員間のオンライン推進についてのポイント〉

- ① 自分がまず学び、やってみる（知識を得る）
- ② 一歩踏み出せない原因を聞く（何がハードル？）
- ③ 少しずつ仲間を増やす（楽しそうな姿を見せる）
- ④ 初歩から優しく教える（わからなくて当たり前）
- ⑤ 試せる場を何回も作る（失敗してもOK）

（3）ホームページ（以下HP）で情報発信

サポーターの会の情報発信は、Facebookを活用していたものの、より

広く発信するために公式HPの必要性を感じていた。長らく会員のブログをHPの代用としていたが、担当会員が退会したこともあり、公式HP作成は課題となっていた。そうした時、役員の一人が「東京ホームタウンプロジェクト」の利用を提案した。東京都保健福祉局の事業で、「多様な主体が力を合わせて東京の課題解決に挑戦する仕組み」とサイトに謳っている。社会人として培ったビジネスの経験・スキル・専門性を活かして社会貢献する「プロボノ」を、地域課題に応じてマッチングさせて協働、課題解決への道筋を描いていく仕組みだ。

この申請審査を通過し、HP作りを支援してくれることになったのは育休中のママさんたち6人組「ママボノ」（プロボノのママ版なのでママボノ）である。このご時世なので打ち合わせはほとんどZoomを進める。学んでいたZoomのスキルが早速に役立った。ママボノさんたちは家のパソコンの前で赤ちゃんを抱っこしたりおんぶしたりしながら参加。私たちも、思わぬ異世代間交流となった。今は母の顔だが、全員IT業界のプロである。システムエンジニアだったり、パソコン講習会の

講師だったりスキルは非常に高い。彼女たちから求められたのが、サポーターの会の情報である。どういう活動をしている団体なのか。それぞれの活動の内容の解説と写真。何を一番伝えたいのか。重要度のランクを教えて欲しいと言われた。それがサイトマップとして整理されていく。

完成度はとても高い。生涯学習という言葉に全く縁がない若いママたちに、サポーターの会を一から理解してもらうのは大変だったが、逆に考えるといつも仲間内だけで過ごすぬるま湯のような環境に浸っていなかったかと反省。ママボノさんたちからの問いは自分たちに跳ね返ってくる。たまたまこの時期にHPを作成するということを通じて、会の存在意義、活動の見直しと振り返り、そして情報の整理ができて、サポーターの会を改めて客観的に外から見る良い機会となった。

※巻末にHPのURL、QRコードを記載

**第3章 様々な社会資源を活用した実践事例「ユニバーサルデザインマップづくり」**

ICT、資金調達等々の様々な社会

資源活用にチャレンジし実践したのが「ユニバーサルデザインマップづくり」だ。今では、「生涯学習サポーター養成講座」と同様に、サポーターの会の活動の中核の一つとなっているこの実践は、これだけで1つの実践報告になりえると自負している。しかし、この詳細はまた別の機会にさせていただくとして、今回は社会資源を、どのようにツールとして活用したかという切り口から記させていただく。

(1)「バリアフリーマップ」との出会い  
「ユニバーサルデザインマップづくり」のきっかけは、千代田区に拠点を置くNPO法人リープ・ウィズ・ドリーム(以下LWD)との出会いに端を発する。LWDは、バリアフリーマップ作成を通じて住みやすい街づくりに貢献する団体である。バリアフリーとは、障害者・高齢者・生活弱者が社会生活に参加する上で生活に支障となる物理的な障害や、精神的な障壁を除去する意味で使われる。しかし、このバリアフリーマップは、「障害のある人もない人も、すべての人が快適に利用できるため」

の調査であり、バリア及びバリアフリーを示すマップ作りであった。

2016年9月、LWDは、千代田区内に次いで中野区のマップづくりの着手を決め、中野区社会福祉協議会を通じて、サポーターの会にボランティアの要請があった。私たちは、社会的貢献活動の機会と捉え参加を決めた。この活動は、今まで何気なく歩いてきた自らの地域や課題を知る貴重なきっかけとなった。

調査キットは、LWDが開発したものが揃っており、坂の角度を測る傾斜計、段差を測るメジャー、記入のためのボード、トイレマークなどのアイコンシールなどがある。以降この調査キットは、サポーターの会の活動でも活用させて頂いている。

この年は、LWDにサポーターの会が協力すると言う関係で実施し、中野駅南北周辺を調査し、なかのZERO指定管理者や区内社会福祉法人からの資金援助もあり、500部のバリアフリーマップを発行した。

この参加を機に、今ではLWDの活動拠点である千代田区の企業ボランティア研修、区職員研修のサポート、中

央区のバリアフリーマップ作成ボランティア講座のスタッフ等、区外サポートという活動の幅も広がった。

(2) オリンピック・パラリンピック機運醸成助成金の活用「中野コンセルジュ・おもてなしマップ」づくり

バリアフリーマップ作成協力を通じて、中野区にオリンピック・パラリンピック(以下オリ・パラ)機運醸成助成金があることを知った。東京都から各市・区に助成金(1件につき限度額20万円)が設けられたものだ。2017年度、マップ作成に意義を感じた私たちは、この助成を獲得し、サポーターの会の活動としてマップを作成することを決めた。名称は「中野コンセルジュ・おもてなしマップ」作成事業として申請した。バリアフリーマップに、中野区の地域情報を追加し、オリ・パラを機会に訪れる方々はもとより、区民にとっても有益なマップを作成することは、助成金の目的にもかなっていると思ったからだ。結果は満額回答、LWDの全面的協力を得て、1000部印刷・配布された。

この助成金は3年間限定だったが、

2019年までの3年間フルに利用し、毎年工夫を加えながら作り続けた。マップ作成は、サポーターの会の活動の見える化にも役立った。生涯学習という一言では言えない分野の活動の中で、目に見え、手に取れる成果物が存在することは、会員の達成感も大きかった。また、手に取った方たちからは感謝の声が寄せられ、ボランティアにとつては嬉しい結果となった。

### (3) 様々な社会資源の活用「ユニバーサルデザインマップ」

①「区民公益活動推進基金助成」の獲得  
3年間の助成金も終了したところで、区の担当者より、区民公益活動推進基金からの助成(以下基金助成)を紹介された。これは中野区条例に基づき助成制度で、申請事業の先駆性・創造性・発展性・継続性のある活動に対して助成するものだ。但し、区長付属機関である「区民公益活動推進協議会」の審査を経なければならず、なお且つ審査時に公開プレゼンテーションを、事業終了時の公開報告会での報告が義務付けられている。

2020年度のマップ作成を考えた

私たちはこの助成金獲得にチャレンジすることにした。審査通過の角度を上げるにあたって、今までのマップを土台にして、先駆的な「ユニバーサルデザインマップ(以下「UDマップ」)」として改良し、ユニバーサルデザイン(以下UD)の理解啓発の一助としてはどうだろうと考えた。

バリアフリーがバリアに対処する考え方に対して、UDは障がいの有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインすることをいう。例えば、建物玄関前の段差にスロープを付けるのはバリアフリーの考え方、設計時点からスロープを計画して作り上げるのがUDの考え方と言われている。このように、人々が気持ちよく生活していくための知恵や技術で環境を整えていく社会が求められている。因みに中野区は、2018年4月に「中野区ユニバーサルデザイン推進条例」を施行し、11月には推進計画素案(5年計画)をまとめUDの街づくりを推進しようとしている。区内にUDの施設、公園も増えたので、マップにはUDの説明も含めて記号として記載すること

とした。

### ②「なかのユニバーサルデザインマップ作成講座」開催にトライ

UDマップ作成にあたっては、会員間の学びにとどめず、広く一般区民の生涯学習の一つとして位置付けることはできないかと考えた。それならば、「UDマップ」II「社会貢献可能なマップ」の作成講座として成立する。サポーターの会の活動の新展開ともなりうると考えたのだ。

こうした発想を与えてくれたのは、他区の講習のサポートをしたことがきっかけだった。参加者の方々が提出された振り返りシートに、「初めて体験した車いすからの目線が、何気なく歩いていた街を良く知ることになった。」「弱者の気持ちや思いやりを持つことがとても大切だと気付いた」という旨が多数記載されていた。

このことは何を示唆しているのか? 街づくりに貢献するまち歩きも、他人事を自分事に変える変換をしない限り役に立たない、ということだと思う。こうした気づきから、一般区民の参加を募り、中野の街を自分の目で見て体

験して、誰もが活用しやすいマップ作りをする必要があると考えた。

努力も実り、UDマップ作成事業（講座）は、基金助成の書類審査、プレゼンも無事に通り、約15万円受けることが出来た。不足資金の内10万円は、懇意にしている社会福祉法人や企業等に頭を下げて、協力してもらった。その他は、講座参加費やサポーターの会資金から捻出し、2分冊（地域）各2000部の発行した。

講義では、当事者にも語っていた。この日常の話はインパクトが大きく、多様性の社会の在り方を認識する良い機会となった。実地踏査は、車いす体験をしながら行った。健常者には当たり前でも生活弱者にとってみればバリアになることを体感した。

この講座は、若い母親や地域活動実践者などの一般区民の参加で、今までの講座とは違う運営となり大いに学ぶことができた。また一般区民と共に学ぶ方法論として、実践活動が持つ大きな力に展望を開くことができた。一般区民にとってマップ作りの実践が目からウロコであったように、私たちの講座運営も目からウロコとなった。

### ③クラウドファンディングにトライ

2020年度の基金助成の報告会で、文字の拡大や掲載地域の拡充等の意見が出された。この意見を活かすとしたら、2021年度は3分冊（地域）3000部の発行となり、当然、予算も30万円に増やさなくてはならない。助成金交付は経費の2/3のため、40万円以上の予算建てとなり、10万円は資金調達が必要となる。

不足分を知人に頼るだけの方法は、正直互いに辛い。広く社会全般に支援を募ることが出来るクラウドファンディングへのチャレンジを考えた。活動の意義を広範囲にアピールすることに有益であると感じたからだ。クラウドファンディングを活用し、社会貢献活動に賛意を表する人達に委ねようと考えた。とはいえ、右も左もわからない。そうした時に、前述した東京ホームタウンプロジェクトを通じて出会うクラウドファンディングを経験したT氏と、故国でアートを学んだ学芸大学院生のI氏が協力を申し出てくれた。

しかし、このチャレンジは思いの他難航した。まず、サポーターの会は任

意団体で法人格を持たないことから、NPOや一般社団法人とは信用度の差があることを思い知らされた。T氏と、I氏が協力してくれなければ、指定された支援金募集のページ作成までたどりつかなかったと思う。二人のおかげもあって、総計14万円の寄付をいただくことができ、予定通り3分冊（地域）3000部のマップ発行が可能になった。

リターン設定等に反省点はあるが、このクラウドファンディングにチャレンジした事で、またしても多くの気づきを得た。

※巻末にレイダーフォーのURLを記載

### ④ICTを利用してのハイブリット講座 YouTube配信にトライ

2020年度の基金助成報告会の席上で、評価委員から「この素晴らしい活動を、会場に來られない人にも伝える方策はないか」と言う声があった。いわゆる講座のハイブリット運営の要望である。言うは易し、どのようにして進めていけばよいのか困惑した。その時に、「YouTube配信がベターです

よ」とプロからのアドバイスがあった。そこで、意を決して、2021年度講座では、全講座のうち講義回の3回で、YouTubeオンライン配信を企画した。配信をプロに頼めば数十万円かかることを知り、知人を頼った。当時からZEROにはなく障壁となったWi-Fi(現在は、機器の貸し出しが可能)は、レンタルをした。配信は、各回毎にURLを特定して、申込者のみとした。

第1回目は、開始直前に不具合が起き、冷や汗ものだった。また、途中YouTube受講者から「撮影場所が悪く隠れて見えない」などの苦情が入り、慌てて修正もした。3回目には、音の反響が大きい会場だったことから「音が反響して聞きにくい」などの不満が出た。慣れないことには困難がつきものだが、同時配信の難しさを味わった。配信は、アーカイブ配信する道がベターであることを学んだ。また、会場選びの留意が必要で、それによって講座の成否を左右するような結果を招くことがあることも学んだ。

オンライン配信には、設備・人材・準備が必要である。そもそも、受講側

がICT機器を使えない人、慣れない人もいる。しかし、もうこの道は戻れないと思う。リアルの方も設定しつつ、次年度以降も取り組みたいと考えている。

#### 第4章 まとめ

物事を進める上で、培ったスキルは最も重要なファクターである。「例年通り」は悩まなくて良いし、学習し実践した通りに繰り返せば間違いがない。地域等の行事にはよく見られるパターンである。毎年同じように行う事で地域の理解が得られ、権威づけられて、曲げられない。だからこそ、新しい課題をクリアするのは苦手である。

スキルの壁を乗り越えられる新しい方策にチャレンジし、分からない未知の部分に学ぶ、先輩たちの意見は素直に聞く、そして実践してみる。この繰り返してしか解決する方法は見つからないと思う。

今回はICTを切り口として、サポートターの会の運営とマップ作成事業をまとめてみた。出だしにも記したが「集う・学ぶ・つながる」という生涯学習・社会教育の根幹ともなるところが揺ら

いでいる。新しい時代には新しい形が求められてくる。スキルは手段でもあるが、活動や団体のあり方も変えてくる。この二年間、ひるむことなく新しいことにチャレンジしてきた。失敗も多々あったし、抵抗、反対意見も説き伏せつつ、前に進んできた。そして、振り返ってみると、昔には戻れないことがわかる。Withコロナ時代の波は、今を生きる人に等しく押し寄せてくる。私たちのような名もない地域の小さなボランティア団体でさえこの通りなのだから、更に苦労をしている団体も多いことだろう。是非「学び」の火を消さないで欲しい。「学び」の場を無くさないで欲しい。「学び」はどんな時代も生き続けていくエネルギーの素と信じている。

※なかの生涯学習サポートターの会HP

<https://www.nakano-lss.com/>

※READYFOR 2021区民が作る

「中野ユニバーサルデザインマップ作成講座」

<https://readyfor.jp/projects/73574>

